役員改選

会員各位

平成21年6月13日開催の長野東高等学校同窓会第33回総会において役員が選任され下記の通りそれぞれ就任いたしました。
新会長のもと役員一同決意を新たにし、同会の発展のために精励致す所存でございますのでご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

役員一同

退任の挨拶

朝日　学

この度、32年務めさせていただきました同窓会の会長を退くことになりました。

この間、何事もなく順調に職務を全うできたことは、ひとえに会員各位の温かいご協力の賜と、心より感謝申し上げます。

在任中は、多くの東高を愛する先生方、温かいＰＴＡの皆様、そして優秀な同窓会スタッフに恵まれ、若干18歳でこの職に就いてからは、ほとんど助けられながらの毎日でした。半世紀を生き、成長できた現在の私があるのは、そのお陰であると確信しています。

新会長の西澤敏さんは、本当に東高のことを考えてくれる人物です。

会員各位におかれましては、どうぞこれからも東高を愛し続けて頂き、西澤新体制へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

会長就任にあたり

西澤　敏

長野東高校同窓生の皆さん、この度の総会で同窓会会長に就任いたしました西澤 敏（３期生）です。よろしくお願いいたします。

この同窓会も30年以上、約一万名におよぶOBを有する会となり、お子さんが母校に入学された、とよく耳にするようになりました。

また最近は東高校の後輩たちの活躍をいろいろな場面で聞くことが多くなり、頼もしく思っている方も多いのではないでしょうか。

希望に満ちた後輩たちをさまざまな形でサポートし、また一方同窓生のネットワークを通じて交流を深めることができる同窓会として情報発信をしていくことができればと考えています。役員一同がんばってまいります。

よろしくお願いいたします。

平成21年度 長野東高校同窓会役員

会　長	西澤　敏(3)
副会長	三ツ井豊一(1)　太田　昌孝(4)　西沢　正隆(14)
理　事	大平　邦夫(1)　塩入　康司(1)　安川　勇(2)　松本　一展(3) 新保　直弘(3)　倉野　立人(5)　山下　進(11)　山本　富識(12)
事務局長	清水　修(12)
書　記	二本松竜彦(14)　森田　舞(16)　細田　泰成(20)　松岡　直美(14)
顧　問	朝日　学(1)　河原田　勲(1)

同窓会だより

皆様の会費が後輩たちの“ガンバる源”になっています！

前号から維持会費の納入が郵便局に加え、お近くのコンビニエンスストアでも受付けできるようになり、会員の皆様の善意が格段に届きやすくなりました。引き続き温かいご支援の程よろしくお願いいたします。

「ちょっとコンビニへ。」の時、少しだけ思い出して下さい。あなたの母校と今もがんばってる後輩たちのこと。

ご注意とお願い

個人情報保護法に伴い、同窓会でも名簿などの取り扱いには十分気を配ってはおりますが、相変わらず悪質な名簿業者が後を断ちません。

同窓会では名簿管理および発行等に関して，名簿発行支援業者

株式会社 サラト

http://www.salat.co.jp/

に委託しております。これ以外から連絡や振り込みに関する書類等が届くことはありませんので、ご確認のうえ、日頃から十分注意するようお願いします。

長野東高校の同窓会の活動は、皆様からの維持会費により運営されています。

入学生、卒業生への記念品をはじめ母校の後輩たちへの支援など諸活動推進のため維持会費の納入をお願いします。

＊平成21年度分の納入は同封の振込用紙によりお近くのコンビニエンスストアまたは郵便局にて２週間以内にお願い致します。
＊卒業年度、氏名を必ず記入してください。
＊「通信欄」に同窓会に対するご意見をお寄せください。

＊卒業生のみなさんへ

お店をPRしたい方、同期会の告知をしたい方、部活やサークルのOB会報告…など。
ココは東高の卒業生が自由に、そして有意義に集いその輪を広めていきたい。そんな場所でありたいと思います。
会員のみなさんのちょっとした情報が新たな出会いをもたらせてくれたり、会の成長・発展に大きな役割を果たしてくれることと思います。
母校のため、同窓会発展のためにみなさんの応援とご協力を心からお待ちしております。
これからもよろしくお願いいたします。

情報専用FAX
026-251-1789

長野東高等学校同窓会報

しのめつうしん

●CONTENTS

東高Now 演劇部特集
私的おしごと拝見
同窓会だより
役員改選

［演劇部の発表会より］

■発行■
長野県長野東高等学校同窓会
〒381-0022　長野市大豆島2743-1
TEL. 026-221-8111
FAX. 026-251-1789
発行責任者　三ツ井豊一
編集責任者　新保　直弘
編集・印刷　日　謄　社
No.17
2009年7月発行

演劇が熱い!!

昨年8月8・9日、千曲市あんずホールで行われた「第35回北信地区高校演劇合同発表会」において本校演劇部は見事、優勝にあたる金賞を受賞。同年11月1・2日、松本で開催された第25回長野県高校演劇合同発表会(県大会)でも優秀賞を獲得。今年1月に行われた関東大会への出場を果した。惜しくも全国大会までは届かなかったものの、部員の減少などで廃部の危機を乗り越え、1年生だけで臨んで掴んだ栄誉はまさに“快挙”と呼ぶにふさわしい。

[逆境をバネに]

部室を訪れると、発声練習の元気な声が耳に飛び込んでくる。ほんの1年前には廃部の危機にあったということがおよそ信じ難い明るい笑顔がそこにあった。

部員は現在、2年生7名、1年生5名。「残念ながらすべて女子です。」と話してくれたのは部長の田牧千佳さん。先輩のいない1年生の時から部長として演劇部を率いている。

「1年生も含め部員が増えてくれてとても嬉しい。できれば男子部員が入ってくれるともっといいんだけど…東高の男子はシャイなのかなぁ。」 確かに他校では男子部員の方が多いところも数多くあり、また演劇の幅も大きく広がるため少しでも演劇に興味のある男子には是非、奥深い演劇の世界に飛び込んでみてもらいたいものだ。

[挑戦]

昨年の北信優勝、県代表という“快進撃”をうけて「今年は追われる身。もっともっと練習して今度こそ全国大会に行きたい！」とキッパリ。苦難を乗り越えた自信と力強さが伝わってくる。それでも厳しかった時期のことに話しが及ぶと「ホントに辛いことがたくさんありました。でも演じることが大好きだから。」 そう語ってくれる彼女からは以前にはあったであろう迷いや不安などは全くない。

話しが将来のことに及ぶとまた顔がほころぶ。「やっぱり役者さんになれれば最高ですけど…でも演劇で学んだことを活かせるところにいたい。」そう語るのにはワケがある。憧れの先輩がいるのだ。本校演劇部の出身で現在は声優として活躍中の伊藤かな恵さんだ。

演劇部としての目標も将来に対する夢やビジョンも、自分の言葉ではっきりと語ってくれたのがとても印象的で好感がもてた。

とはいえ高校2年生。もしかすると強い自分を見事に“演じ”ていたのかもしれない。

[サバの缶詰]

昨年見事県代表の座を射止めた脚本のタイトルである。

メールの掲示板にイタズラ書きされ学校に行けなくなった女子高生と、両親の離婚問題で田舎の祖母の家に預けられた小学生が、廃線になった無人駅のホームで出会って、やがて互いに前向きになっていくというほろ苦いひと夏の物語である。

この脚本「サバの缶詰」の作者は本校教諭の清水信一先生だ。

“快進撃”については前述のとおりだが、個性豊かな彼女たちをここまで成長させ、ひとつにまとめた牽引者で演劇部顧問である。同シナリオは昨年の県大会でも“優秀賞”を受賞した。

「4月に赴任してみると演劇部員はゼロ。そこへ4人の演劇未経験の1年生が入部し、新たな東高演劇部の活動が始まった。当初の目標は東雲祭と北信大会での発表。大会は、制限時間60分のなかで、演技はもちろん、演出・舞台美術・音響・照明・衣装まで審査の対象となる。舞台用語も何もわからない状態からのスタートだったんです。」

しかし、先生の演劇に対する情熱が部員たちに届くのに多くの時間が掛からなかったのであろう。むしろ恐いもの知らずの1年生は日々成長を続け、自信をつけ、そして大きな花を咲かせることに繋がったのである。 限られた人数のなかで練習と同時にセット造りや音響の準備などをすべてこなしていくのは容易なことではないだろうが、「欲張らない素直な演技と脚本との相性がぴったりはまって思わぬ結果となった。だが、これからが正念場。 成長しつつある部員たちの新しい舞台を期待したい。」

新たな目標に挑むために部員みんなで選んだ脚本は「七人の部長」。届いたばかりの台本を前に「ワクワクする。」(前出 田牧部長) ここからまた演劇部の挑戦が始まる。

全国目指して頑張れ演劇部!!

私的 おしごと拝見

(あのにんげん草の つややかな 緑色がうるさい

すぎもとまいこ

詩人。
1973年生まれ。
長野東高校卒業。
東京都在住。
学習院大学文学部哲学科卒業。
2002年に第40回現代詩手帖賞受賞。
第一詩集『点火期』(思潮社、2003)、共著に『詩のリレー』(ふらんす堂、2006)、『生きのびろ、ことば』(三省堂、2009)。
2008年、第二詩集『袖口の動物』(思潮社)で第58回*H氏賞受賞。同年、第13回信毎選賞受賞(信濃毎日新聞社主催)。
文芸批評、エッセイなども手がけるほか、宇都宮A&S専門学校文芸創作科で講師もつとめる。

[詩人] 杉本真維子

杉本真維子 × 記念講演会

*H氏賞

日本現代詩人会が主催する、新人のすぐれた現代詩の詩人の詩集を広く社会に推奨することを目的とした文学賞。詩壇の芥川賞とも呼ばれる。

杉本真維子 詩集

『点火期』(思潮社)

『袖口の動物』(思潮社)

『東雲祭』の熱気を越えて～今・ここ・わたし

昨年10月30日、PTA、生徒をはじめ地域の方々など大勢の方にご参加いただき、本校卒業生で詩人の杉本真維子さんを迎え、「『東雲祭』の熱気を越えて～今・ここ・わたし」と題し、講演会が催されました。

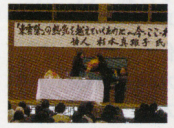
最初に母校での思い出が語られました。自由な校風、エンジ色の制服にあこがれ入学したこと。また谷川俊太郎作詞の校歌、特に「白いノートに問いかけの文字をしるして」の歌詞が大好きで、今でも誇りに思っていることなどです。

次に詩の世界について、小学校に入る前から耳に飛び込んできた言葉の面白さに興味をひかれ一冊のノートに書きとめてきたそうです。

東雲祭では、「熱気に包まれて夜空を見上げると自分の未来が見えるようなときめきを感じ、クラスメイトがいとおしく、時間が過ぎることに切なさをおぼえた。心と体がアンバランスで十代の心は騒がしかったと思う。東雲祭で奮い立った気持ちをいかに越えていくか。」と。

最後に後輩たちへのメッセージとして「強い心で感受性を自分自信で守っていってほしい。そうすれば何も恐いものはない。」と語ってくれました。

講演が終わり花束を受け取り、校歌が流れる中、退場する際、「懐かしい」と涙ぐんでいた姿に、母校への熱い思いが感じられました。


講演後、花束を受け取る杉本さん。右はサイン。